

『オメガバース 集団強制妊娠～神龍のツガイが汚されて～ 2』

著：黒兎

ill：いけや

「淫乱め。まだ発情期前なのに、こんなに濡らしているのか？」

ゴム手袋の指が出入りするたび、グチュグチュと妖しい水音が響いた。溢れてきた蜜が、甘い芳香を漂わせ始める。

ジュルっと音を立てて、医者は媚薬のように甘い蜜を舐め、美味そうに飲み干していく。

(変態め.....)

実際、 Ω が溢れさせる愛液には花の蜜のような甘みと、 α を惹きつけてやまないフェロモンが含まれているらしい。

しかし、番を持つ Ω は、パートナー以外の α に蜜を啜られても飲んだりしない。むしろおぞましい嫌悪感しか湧いてこなかった。

「いい味だ。さすがに、別格と言われるだけのことはあるな……。今日は、わたしの講義の実習で、学生たちにもこの蜜を味わってもらおうと思ってね。がんばって、たっぷり溢れさせてくれよ」

いやらしい笑みを浮かべる医者の意図を知って、湊斗は唇を噛みしめた。

この男は、湊斗の体を弄りまわすだけでは飽き足らず、年若い学生たちの前で晒し者にして楽しむつもりなのだ。

「下種めっ.....」

「口の悪い実験動物には、お仕置きが必要だな」

男は白衣のポケットからボール型の拘束具を取り出すと、湊斗の口に押し込んできた。頭の後ろでベルトを止められると、もう悪態もつけなくなる。

(こんな.....)

一瞬、ロビーで待っていると心配してくれていた秀一の顔が頭をよぎり、すぐにもう一人の冷たくてやさしい笑みを思い出した。

初めて Ω である自分の運命を知らされてから、もう何年も絶え続けてきたことだ。今度もまた数時間、目をつむって我慢すればいい。それだけのはずだった。

でも、本当は嫌だった。蒼焔以外の誰にも、この体に触れられたくない。どんなに忌まわしい運命でも、蒼焔だけは大切に慈しんでくれたから。そして.....。

「さあ、入ってきなさい。神の番といわれる、このシティでも唯一の被検体だ.....」

ぞろぞろと入ってきた学生たちは、椅子に縛められた湊斗へ、一様に蔑みと好奇心のまなざしを向ける。

シティの医療センターで学ぶ学生たちだ。その全員が将来を約束されたエリートの α だろう。

獣のように三ヶ月ごとに発情し、 α 相手にあさましい愛欲に狂う Ω は、彼らにとって興味を惹かれる実験動物にすぎない。

「いやらしいな。体はオスなのに、こんなに後ろまでグショグショに濡らして.....」

「これで、発情期前なんでしょう？ フェロモンで、頭がクラクラする」

椅子を囲んだ学生たちは、遠慮なく湊斗の体を覗き込んで、思い思いの意見を述べていく。

「さあ、君たちも蜜を味わってみなさい。番のいない諸君は、初めてかな？」

「はい……。ああ、甘いですね。本当に花の蜜みたいな匂いだ」

「ここで、生殖するんですね。こんなに細い腰で、子供が産めるのか……」

それぞれに指を伸ばし、湊斗の性器を掻き回しながら、学生たちは愛液を掬って、匂ったり舐めたりし始める。

「さあ、クスコで開くから、全員、中をよく観察しなさい」

医者の声と同時に、冷たい金属の器具がねじ込まれてくる。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>